

神話教育で国を愛する心を育もう

我が国においては60年振りに教育基本法の改正に着手し、愛国心等の論議が活発になされ、子供たちの今後の教育を進めていく上で非常に大事なことが議論されました。議論の過程では「愛国心」の表現について否定的な議論がありました。「国を愛する心」を否定する民族や国家は世界広しと言えども日本だけでしょう。本来、国民が祖国に誇りを持ち国を愛する気持ちを有するのは、家族や郷土を愛する心に通じるものであり、人として国民としてごく自然な心情なのです。日本では何故他国と同じように素直に国を愛する事ができないのでしょうか。その原因は正しい歴史教育がなされていないことにあると思います。

日本人として生まれながら、自身が属する日本と言う国の成り立ちを知らなければ、日本人としての誇りやアイデンティティを自覚することは困難です。日本がどのような国なのか分からなければ、国を愛する心も持ちようがありません。日本の歴史を語る上で本当に重要なのは、国の成り立ちを説き明かす物語、即ち神話です。なぜならば、神話は先祖が語り継いできた神々の物語であり、先祖の心が反映しているとともに、我が国の国柄を表しているからです。その神話を記述した「古事記」の上巻や「日本書紀」の神代巻は、日本民族発祥の物語を後世の日本民族に伝えたものです。

「日本書紀」の神武紀には日本民族の建国の理想が物語られています。「六合をかねて以て都を開き、八紘を掩ひて宇と為す」とあり、これは「国中を一つにして都を開き、さらに、天下に住むすべての者が一つの屋根の下に大家族のように仲良く暮らせるようにすることは、何と良いことではないか」という意味です。天皇家の初代と言い伝えられる神武天皇以来、2666年という悠久の大昔に、今の国連憲章の精神と同じ、平和を理念とした日本民族の建国の理想がうたわれていたのです。何故、子供達にこのような誇らしい民族の物語を教えないのでしょうか。

一部の大人のよこしまなエゴと日本人全体の怠慢のために、子供たちに自国のすばらしい真実を教えず、そのかわりに私たち日本の先祖は犯罪者であるようなことを教え、子供たちから日本民族としてのアイデンティティ奪い、暗く悲しい気持ちに追いやり、自国の歴史の肯定面を伝えることが何か恥すべきことであるかのように、南京大虐殺や従軍慰安婦などの過去の暗部、それも真実さえも定かでないと言われるものばかりを並べ立てる教科書などはもう全く必要ありません。

「日本神話の心に回帰することこそ、行き着くところまで来てしまった現在の唯物文明である現代文明を滅亡のふちから救う唯一の道である」と、イギリスの偉大な歴史学者、A・J・トインビー氏は言っています。

未来に生きる子供たちこそ、親にとっても国家にとっても一番大事なはずであります。そこで、これからの未来に生きる子供たちが日本人としての自覚をしっかりと持ち、民主的、平和的な国家社会の形成者として主体的に生きるためには、民族の建国の理想、我が国の神話、そして自分の国の歴史について、正しい理解が絶対的に必要なのです。

その為にはまず神話を歴史教育に取り入れなければなりません。現在、中学校で使う歴史教科書の中では、扶桑社の「新しい歴史教科書」だけが神話について詳しく記述し子供達に夢とロマンを与えています。東京では杉並区だけがこの「新しい歴史教科書」を採用し今年の新学期から神話を歴史の授業に採り入れています。他の区でもこの教科書を使うよう、都民の皆様を各区の教育委員会に届けていただきたいと思います。

神話から始まる正しい歴史教育で、子供達に国を愛する心と明るい希望を与えようではありませんか。

扶桑社の「新しい歴史教科書」を 子供達に届けよう！

【新しい歴史教科書をつくる会東京支部】